

# 1998年における東芝の技術成果

## コア競争力の強化と新たな価値連鎖の創造

取締役 専務  
笠見 昭信



ダイナミックな事業構造の変革とグローバルな激しい競争のなかで、今ほど市場を見据えた技術力が問われる時はありません。戦う事業領域を明確に設定し、そのコア競争力を一段と強化するとともに、それぞれのコア競争力の新たな価値連鎖をいかに創造していくかが企業成長の大きな課題です。そのためには、コアとなる技術と知的財産権の強化・深耕、それを成し遂げる人材のグローバル視野での活躍が重要となってきます。

私どもは、①携帯情報機器とネットワーク技術、②コンシューマ向けデジタル技術、③サービスを含むシステムインテグレーション、④モバイルとデジタル放送向け情報サービス、⑤エネルギー・環境技術、⑥これらのシステム、サービス、機器の価値を生むシステム LSI やディスプレイなどの次世代部品技術を重点技術分野とし、中期的に強化を図っています。このようななかで、1998年の技術成果のポイントを以下にまとめてみます。

モバイル&情報サービス分野では、人気の高い“駅前探険倶楽部”の新メニューを開発し携帯情報端末“Dialo”と合わせたサービスが始まりました。次世代移動通信のコアとなる W-CDMA の開発も積極的に進めその端末試作機を完成しました。研究拠点としては、次世代無線技術の研究開発力強化のため昨年8月に英国ブリストル市に通信研究所を設立しました。新会社設立としては、インターネット上の最新の情報を収集編集してサービスする新会社“(株)フレッシュアイ”、移動体向けの放送サービス事業をねらった“モバイル放送(株)”を、他社にも参加いただき共同で設立しました。

パーソナル情報・映像機器として、薄型のスリムパソコンのシリーズ3機種を商品化し好評を博しました。また、当社オリジナルのGMR技術を使った2.5インチ型10Gバイトの磁気ディスク装置も開発しました。スーパーフラット管を用いたワイドテレビ“FACE™”, DVD-Videoの新シリーズSD-V 620, DVD-ROMも新たな市場を拡大しました。

エネルギー・環境分野では、原子炉内シュラウド取替技術を世界で初めて確立し工事を完成させました。また環境負荷の少ない消化ガス利用型燃料電池システムの開発を行いました。

上記システム・機器を支える電子部品分野では、最小チップサイズの128Mビットシンクロナス DRAM や256MビットのNAND型フラッシュメモリを製品化しました。スマートメディアカードのメモリ容量は64Mバイトとなり、デジタルスチルカメラだけでなく半導体記録媒体としての市場が大きく期待できます。

以上、ダイナミックに変化する市場に対応し製品とサービスを併せて提案していく当社の技術施策の一端を述べましたが、昨年の具体的な技術成果は本文をご一読いただきたいと思います。皆様のご助言、ご指導をいただきたくお願い申し上げます。